

東アジア（日中韓）比較文学研究という視座

寶 新光

はじめに

私が初めて来日したのは2010年10月である。中国山東大学修士課程に在籍中の私は交換留学生として神戸大学に来たのである。1年間の交換留学を終えた私は、2011年9月に帰国して修士論文を提出した。そして2012年4月、また日本に戻り、神戸大学大学院修士課程に正式に入学し、現在博士課程に至っている。

中国で韓国語・韓国文学・中韓比較文学を専攻した私が、なぜ韓国ではなく、日本に留学したのか。私の選択について質問する人が多い。日常生活では「日本を知りたいから」とか、「東アジア的な研究方法を身につけたいから」という理由で、その場しのぎをしてきたが、ここでは、来日までの過程を振り返り、現在の研究内容を紹介させていただくことにする。

1. 日本留学の決意——日中韓比較文学への目覚め

私は2005年から4年間、山東大学韓国学院で韓国語を専攻した。その間、韓国ソウルの国民大学に留学したことがある（2007年）。2009年、同山東大学大学院修士課程に進学し、中韓近代比較文学を専攻した。近代以来、中韓両国の文学は日本から多大な影響を受け、日本的な要素が大量に流入しているため、中韓文学の比較研究には日本との関わりを視野に入れる必要性を感じていたから、日本にも興味を持ち、日本語を本格的に学習し、日本文化を理解し、日本留学を考えるようになった。

当時、中国の大学で韓国語を専攻する学生や韓国文化を専攻する院生にとって、学問を深めるには、韓国の大学へ留学し、大学院（修士・博士）課程に入るの当たり前で、主たる選択肢であった。そのため、私の「日本留学」は異例のことであった。

当時、私の日本留学の決心に影響を与えたのは、牛林傑先生と崔博光先生のアドバイスであった。指導教授であった牛先生¹は、梁啓超と韓国開化期文学との影響関係研究の専門家であり、幅広い研究視野を持つ優秀な研究者である。来日前の牛先生の話は印象深く、今でも心に残っている。

「あなたの日本留学に賛成する。日本に行って専攻を考える時、韓国文学か、日本文学か、中国文学かではなく、東アジア文学を研究する意識が必要だ。今の時代、将来の時代に必要な人材は、日・中・韓の言語に精通し、東アジア文学を研究し、三か国の文学を包括的に理解する研究者である。短期間の交換留学だけでは不十分だ。博士課程まで長期間の日本留学を勧めたい」と。

自分の最も尊敬する先生からの激励は、私の日本留学の決意を固めさせてくれた。特に「日中韓の言語に精通し、東アジア文学を研究し、三か国の文学を包括的に理解する」という言葉は、来日してから何をいかに研究するべきかと悩むたびに、「指針」的役割を果たしてきたと言える。

また、崔先生²も私の日本留学を積極的に支持してくださった。日本留学（東京大学博士課程）の経験を持つ先生は、その重要性を教えてくださいただけでなく、生活費の斡旋から受け入れ教員への連絡まで、多くの面で助けてくださった。崔先生のアドバイスは次のようであった。

「学術交流が日増しに活発になる東アジアにおいて、一国の文学、あるいは二国だけの比較文学を研究する時代はもう過ぎている。現在、日中、日韓、中韓の二国視点の比較文学研究者は多いが、日中韓を視点に入れる研究者はあまりいない。若いうちに早く日本語を身につけて、将来東アジア（日中韓）文学を研究することのできる研究者を目指さなければならない。全力で支えるから、日本留学にためらわずに早く行ってください」と。

今振り返ると、崔先生の積極的な支援とやや家父長的な「強制的」意見のおかげで、私の日本留学が実現できたのではないかと、感動する次第である。2015年7月、韓国成均館大学比較文化研究所客員研究員としてソウルに滞在した折に、5年ぶりに崔先生と再会できた。

1 牛林傑：1965年生まれ、中国山東大学韓国学院教授・院長。

2 崔博光：1941年生まれ、元韓国比較文学会会長・成均館大学教授・東京大学客員教授・山東大学教授。

両先生はいずれも、日中韓の文学研究という視座を強調している。その意見を聞いた後、「東アジア」をキーワードとする三か国での学会、国際会議、研究論文、図書などを調査してみた。すると、「東アジア文学」をテーマとする国際学術会議の開催や学会などの組織の成立、研究論文の発表、関連図書の出版が盛んに行われており、日中韓の文学を総括する「東アジア文学」の研究は、広範に認められた、今日的な研究課題であることが確認でき、両先生が日中韓の研究を強調した理由を改めて理解したのである。

日本留学の計画については、まず山東大学修士課程の履修期間、交換留学制度を利用して日本に留学し、日本語を習得し（2010年10月～2011年9月）、次に山東大学修士課程を卒業後、日本に戻って修士課程をもう一度履修し、研究の基礎をしっかりと身につけ（2012年4月～2014年3月）、そして日本で博士課程に進学して研究を深める（2014年4月～2017年3月）という三段階に分けて実行することにしたのである。

2. 東アジア比較文学研究の現状

計画通りに私は2010年10月に来日することができ、神戸大学において交換留学・修士課程・博士課程を経て現在に至っている。私の指導教授は朴鍾祐先生で³、身近な力強い助言者である。

来日後、日中韓という視座から考察する東アジアの比較文学は、時代の趨勢に合致し、将来性のある研究領域であると確信するようになったが、研究の現状については以下のような問題点を感じ、発展の余地が大きいと考えた。

第一に、「東アジア文学」をキーワードとする会議・論文・図書の内容を見ると、その多くが二国間（日中・日韓・中韓）の文学関係だけを扱っており、第三国については完全に言及されていないことがわかった。第三国の欠けた「東アジア文学」の研究が、本当の意味での「東アジア文学」研究と言えるのかという疑問が持たれる。

第二に、三か国各自の文学論の組み合わせを「東アジア文学研究」とする点である。例えば、多数の研究者によって執筆された各国の文学論を集め、「東アジア〇〇〇」のように書名を付けて出版した論文集・編著・共著があるが、こ

3 朴鍾祐：神戸大学大学院人文学研究科教授・留学生センター教授、日韓比較文学研究者。

のような研究は各国文学を、日中韓を含む東アジア全体の視野に入れて議論する意識を示してはいるものの、三か国文学の相互関係、各自の特徴の深層の比較、「東アジア的」なものへの帰納など、三か国の文学を包括的に理解する論点が不足し、「東アジア文学研究」としての質が問われるものと思われる。

第三に、東アジアの比較文学は質量ともに古代に偏っていることである。これは、漢字文化の歴史的背景が強く働いているからだと考えられる。古代の日中韓は漢文学の伝統を共有し、共同の文字と文体が比較研究に便利である。しかし、東アジアの近代・現代比較文学研究のうち三か国の視点を持つものは残念ながら多くはない。それは三か国の視点を持つ意識の不足が一因ではあるが、近代以降、日中韓それぞれの言文一致運動の展開と民族語（白話文・簡体字・ハングルなど）の確立に伴い、漢文が共通言語ではなくなり、日本語・中国語・韓国語にそれぞれ通じなければ、三か国視点からの比較研究が難しくなったためであると考えられる。

それで、私は東アジア比較文学の研究範囲を、転換期としての「近代」（あるいは「近代初期」）の日中韓文学に狭めることにした。東アジア文学において、近代初期・近代転換期とは、19世紀末から20世紀初め、外来文学を受容しながら伝統文学から近代文学へ転形・移行した時期を意味する。日本にとっては明治時代の中後期、中国にとっては清朝末期から民国初期、韓国にとっては旧韓末期から日帝初期である。しかし、日本の学界において、明治文学の比較研究は、主に西洋から受けた影響に焦点を当てており、中韓に与えた影響については比較的粗略に扱われているため、明治文学を日中韓の全体に入れて考察する必要があると思ったのである。

3. 進行中の博士論文の研究

現在、私は「日中韓近代初期文学の関連様相研究—明治小説の伝播と受容を中心に」を博士論文のテーマと決め、次のような構想に従って執筆を進めている。

近代初期における日中韓三か国の文学的つながりは非常に密接であった。1890年代後半から1910年代後半に至るまでの20年余りの間、明治日本で発表された小説作品は、中国語と韓国語に大量に翻訳（翻案）され、中韓两国によって広範に受容されていた。この期間における東アジアの文学伝達の経路は、中国から徐々に韓国と日本に伝播した古代と違い、日本で発表されたもの

がすぐに中国と韓国へ伝わったという特徴がある。明治小説の伝来は、当時の中韓両国の文学の新旧交代に重要な役割を果たしただけでなく、両国の社会にも大きな影響を与えた。この時期の日中韓文学の関連性を把握するため、二国視点からの既存研究の不足を克服し、日中韓の視座から、明治小説の伝播・受容の状況を体系的に研究しなければならない。

では、一体どれほどの、どのような明治小説が中韓両国に受容されたのか、その受容において中国と韓国は独自にどのような特徴があり、どのような共通点と相違点があったのか、なぜそのような相違を示したのか。これらの問題を究明するために、論文では二部に分けて論述を展開しようと考えている。

第一部は「巨視的データ論—作品全般から見る明治小説の伝播」である。一般的に明治小説の伝播状況を把握・分析するために、中韓両国に伝わった明治小説の日本原作、中韓の翻訳（翻案）本の題目、発表日、ジャンル、翻訳経路、作者・訳者、掲載誌・出版社、出版地、出版（重版）状況、原文保存状況などの基本情報を調査し、「近代初期日本小説の中文訳・韓文訳総目録（1895-1919）」を作成し、統計的処理によって中韓両国における明治小説受容の特徴を読み取る予定である。（現在まで、合計405点の明治小説の日本原作、中韓訳本の情報の集積がある。）

第二部は「微視的ケース論—個別作品のケースから見る明治小説の受容」である。具体的な作品を通して検討するために、『不如帰』の中韓両国におけるそれぞれの受容（中←日→韓）、『鉄世界』の中国経由の韓国受容（日→中→韓）、『佳人の奇遇』の中国での受容と韓国の不受容（日→中）、『金色夜叉』の韓国での受容と中国の不受容（日→韓）をそれぞれ分析する（矢印は伝播の方向を示す）。

そして、明治小説の伝播と受容を中心に展開された日中韓の近代初期文学に関するデータ論とケース論を総括し、三か国の近代初期文学の関連性・共通性・異質性を結論づけたいと考えている。

4. おわりに

来日して以来5年、私はいつも意識的に日中韓の文学視座から文献を読み、問題意識を持ち、論文を書き、研究生活を楽しんできた。こういう視野からの研究にふさわしい能力をさらに身につける必要性を痛感している。将来、三か

国の言語に精通して東アジア文学を研究し、「日中韓文学を包括的に理解する研究者」になることを目標にしたいと考えている。